

『蜻蛉日記』下巻の構成について

Eiki Yamakawa

松原輝美

Abstract

『蜻蛉日記』の下巻は、中巻の安和二年（969）から天禄二年（971）に至る三年間の記事を承けて、天禄三年（972）の正月元旦の記事にはじまる。天禄三年は、兼家四十四歳、道綱母三十六歳頃で、兼家との間に生じた道綱は既に十八歳になっており、道綱母の兼家との結婚生活は十八年目を迎えていた。この年兼家は、正月二十四日の司召で、右大将兼ねて権大納言に任ぜられた（「二十二日癸丑，政始，今日除目始，二十三日，二十四日同」（『日本紀略』）。なお同年閏二月二十九日には、続いて兼家は正に転じている（『公卿補任』）。その兼家が太政官の次官となって近侍する円融天皇（天皇はこの年正月三日に元服したばかりであった——「三日は帝の御冠^{かうぶり}とて，世は騒ぐ」（『蜻蛉日記』本章段記事）。「三日甲午，天皇於紫宸殿加元服，御年十四」（『日本紀略』）——）の許に、太宰府は九月，十月と月を接して高麗国使の対馬来着の報告をもたらしている（『日本紀略』）。

その天禄三年正月の冒頭の記事を道綱母は「かくてまた明けぬれば，天禄三年といふめり。」と書く。蜻蛉日記では年次を明記した唯一のこの箇所には、「これを書く道綱母の語調も強く，年頭の彼女の新しい気持がうかがえる」⁽¹⁾。「中巻末部の透徹した心境を引きつぎ，新しい年を迎え，周囲の中で厳しく自己を見つめていこうとしている道綱母」⁽²⁾の決意がここにはみえる。その新しい気持や決意は，「ことしも，憂きもつらきもともにこち晴れておぼえなどして，大夫装束^{たいふさうぞ}かせて出だし立つ。」という行為に，また「（年頭の）行なひもせばや（「アメノシタノ人正月ニハミナツツシム。・・・私ニハモロモロノ寺タニ男女ミアカシヨカカゲテ，アツマリオコナフ」（『三宝絵・下・修正月』））と言う祈願に，更にはまた「今年は天下^{てんげ}に憎き人ありとも，思ひ嘆かじなど，しめりて思へば，いと心やすし。」と言う覚悟に形をとって現れてゆくようである。それは，中巻三年間の正月記事と較べてみると，確実な違いを見せて来ている。

安和二年（969）の正月冒頭の記事は「かくてはかなながら，年たちかへる朝^{あした}にはなりけり。」という嘆息にはじまる。天禄元年（970）は正月の記事を欠き日記は，「（安和二

年)十一月に、雪いと深くつもりて、いかなるにかありけむ、わりなく、身、心憂く、人、つらく、悲しくおぼゆる日あり。つくづくとながむるに、思ふやう、
「ふる雪につもる年をばよそへつつ消えむ期もなき身をぞ恨むる
など思ふほどに、つごもりの日、春のなかばにもなりにけり。」とあるばかりである。そして天禄二年(971)正月には、近江の許に通う兼家のうち続く前渡りに一再ならず「胸つぶる」思いをする。その黙殺された怒りは、遂には年半ばになっての鳴滝籠りへと発展して行ったのであった。

それらに較べると今年は何という変わり方であろう。

だがしかし、過去三年に変わる今年の境遇や決意を書き乍ら、日記は同時に、女の生理の悔しさを書く。そして、客観的な状況は少しも変わってはいないのだと言う。

「行なひもせばやと思ふ今宵より、不浄なることあるべし。これ、人忌むといふことなるを、またいかならむとてにかと、心ひとつに思ふ。」という。「道綱母は今までに苦難をなめてきた(その最大のものは鳴滝参籠)ので、「また」という⁽³⁾。「苦渋に満ちた昨年だったが、今年もまた、どんな不吉なことが待ち受けていようかと」⁽⁴⁾思う。「行なひもせばや」と願ったのも実は、兼家が来そうもないからである。この年の元日も兼家は来なかった。「今年は——この「は」に、今までと違って、の意がこもる——天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじ」という覚悟の言葉の背景には兼家の不訪の事実がある⁽⁵⁾。そして「三日は帝の御冠^{かうぶり}とて、世は騒ぐ。白馬やなどいへども、ここちすさましうて七日も過ぎぬ。」という。「心ちすさましうて」は、「月の障りのため気分がすぐれない」⁽⁶⁾というのではない。兼家の訪れがないため、世上の賑わいにも心が動かぬのである。訪れて来ない兼家への拘わりはいかにしても消すことが出来ないのである。

だが、「八日ばかりに見えたる人、『いみじう節会^{せちま}がちなるころにて』などあり。」という、兼家の言い訳を日を隔てて記しながら、過去の三年間のように、少しも変らない状況の中に口惜しくのめり込むということは、今はない。人は節会がちに明け暮れるという年頭の賑わいを、「かくてまた明けぬれば、天禄三年といふめり。」と書く。この「めり」の判断辞は、傍観的表現である。婉曲ではなく傍観の意、世間の有様を傍観する意である、と諸注は解く。

年頭に当たって、自らに言い聞かせるような決意を口にしても、兼家を軸にした客観的な状況は少しも変わりはない。これは、それを覚めて傍観する道綱母の、表現者としての姿勢である。ここには、変わることはないその現実と距離を置いた道綱母の傍観者的な、

ややニヒルな目がある。道綱母が、上・中巻の日録を通して身につけて来た表現者の姿勢を深めて行く時、その虚無の目に映る兼家との日常は今、客観の広角の視座を得て、日記の中に、言ってみれば、「物語風に」構築されてゆくのである。天禄三年の日記は、そういう視点でとらえてゆけるように思うのだが、どうであろうか。

(正月)十四日ばかりに、古き^{うへのきぬ}袍、「これ、いとようして」などいひてあり。「着るべき日は」などあれど、いそぎも思はであるに、使の、つとめて、「おそし」とあるに、

久しとはおほつかなしや唐衣^{からごろも}うち着てなれむさておくらせよとあるに、たがひて、これより文^{ふみ}もなくてもものしたれば、「これはよろしかめり。まほならぬがわろさよ」とあり。ねたさにかくものしけり。

わびてまたとくと騒げどかひなくてほどふるものはかくこそありけれどもものしつ。それより後、「司召^{つかさめし}にて」などで、おとなし。

今日は二十三日、まだ格子^{かうし}はあげぬほどに、ある人起きはじめて、妻戸おし開けて、「雪こそ降りたりけれ」といふほどに、鶯^{うぐひす}の初声したれど、ことしも、まいてこちも老い過ぎて、例の、かひなきひとりごともおほえざりけり。

「いそぎも思はであるに、使の、つとめて、『おそし』とあるに、」の条、底本(宮内庁書陵部蔵『桂宮本』)の「つかひのつとめて」を「使の、つとめて」と解く諸注に対して、今西氏は「つかひ」の上に「て」の脱落をみて「手結^{てつかひ}のつとめて」(正月十七日は射礼、十八日には賭弓が行われた『日本紀略』)と読まれた⁽⁷⁾。これに従えば、この章段は、兼家が「着るべき日」の射礼の日に着用を予定して頼んで来た袍の仕立て直しを巡っての、道綱母との贈答と、それに続く正月除目の第二日目の二十三日に、兼家が榮進するその除目とは何の係わりもなく、古衣のように老いてゆくという、道綱母の感懐を述べたものになる。

が、諸注も言うように、「歌は明るい、やや諧謔^{かいぎやく}を含むもので、兼家も『さておくらせよ』と淡々と言っているし、作者も気楽に『程ふるものはかくこそありけれ』と応じている⁽⁸⁾。作者の「一首は、兼家の歌にこたえ、からんでみせたのであるが、これも風流、文

雅のすさびである」⁽⁹⁾。このあとの、二十三日の条の感懐も、「自然のうつり変りにも感応せぬ自分を嘆くでもなく、かなり素直に述べている」⁽¹⁰⁾。

兼家は正月二十四日の除目で権大納言に昇進した。「司召、二十五日に、大納言になどのしれど、わがためは、ましてところせきにこそあらめと思へば、御よろこびなど、言ひおこする人も、かへりては弄^{ろう}ずるこちして、ゆめ嬉しからず。」と記しながらも、「大夫ばかりぞ、えもいはず、下^{した}には思ふべかめる。」と書く。道綱の表にはあらわにしない喜びの記述は、「それに託された道綱母の喜びでもあった」⁽¹¹⁾、そんな筆致である。兼家も、明けての二十六日、「また、つごもりの日ばかりに、」なんて昇進を祝う手紙の一本もくれないのだ、と恨みがましい文に、繁忙の中でも道綱母を忘れていない。

兼家のみづからの来訪は、正月八日以来途絶えたままであるが、「いまはものともおほえずなりにたれば、なかなかいと心やすくて、夜もうらもなううち臥して寝入りたるほどに、門^{かど}たたたくに驚かれて、あやしと思ふほどに、(召使の)ふと(門を)開けにければ、心さわがしく思ふほどに、妻戸口に立ちて、「とく開け、はや」などあなり。」この兼家の不意の訪れに交す会話もまた、諸注の言うように、明るい、機智に富んだ秀句の応酬である。兼家が得意の猿楽言を誘発して、道綱母の、「軽妙な洒落には皮肉と媚態の響き」⁽¹²⁾さえもある。

八日に来て、天禄三年の正月はこの日、二度目の夜となるのだが、「さて、あかつきがたに、松吹く風の音、いと荒く聞こゆ。ここらひとり明かす夜、かかる音のせぬは、ものたすけにこそありけれとまでぞ聞こゆる」という。烈しい松風の音を聞いて、ゆうべは兼家がいたから守りの神も手をゆるめたのだろうと思うあたりには、兼家を力とすがる(銜^{てら}いのない素直な)女心も窺われる⁽¹³⁾のだが、この時、兼家との情交の時間はあったのか、どうか。その事は、翌二月朔^{ついたち}の記事に譲って、ここには省筆の気配がある。

三

(A) 明くれば二月^{きさらぎ}にもなりぬめり。雨いとのとどかに降るなり。格子などあげつれど、例のやうに心あわたたしからぬは、雨のするなめり。されどとまるかたは思ひかけられず。とばかりありて、「をのこどもはまゐりにたりや」などいひて、起き出でて、なよよかなる直衣^{なほし}、しをれよいほどなる搔練^{かいねり}の袿^{うちきひとかさね}一襲垂れながら、帯ゆるるかにて、歩み出づ

るに、人々「御粥」など、気色ばむめれば、「例食はぬものなれば、なにかは、なにに」と心よげにうちいひて、「太刀とくよ」とあれば、大夫取りて、簀子にかた膝つきゐたり。のどかに歩み出でて見まはして、「前栽をらうがはしく焼きためるかな」などあり。やがてそこともに、雨皮張りたる車さし寄せ、をのこどもかるらかにて、もたげ言たれば、はひ乗りぬめり。下簾ひきつくろひて、中門より引き出でて、さきよいほど大に追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。

これが二月朔のこと、それから三日になって、その夜雪が降った。雪は四日になった今もまだ降っている。

三日になりぬる夜降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。簾を巻きあげてながむれば、「あなさむ」といふ声、ここかしこに聞こゆ。風さへはやし。世の中いとあはれなり。

雪は「今も降る」とある。「この記事が書かれた時、現に雪が降っていたのであろう。下巻の冒頭の一文に珍らしく年号を明記することとも合わせて、この辺りから日記は次第に回想でなくなるのであろう」⁽¹⁴⁾と川口氏は言われた。やがて「日晴れなどして」、八日に父の倫寧の邸に渡る。「父倫寧はこの年正月、丹波守の任を終え（岡一男氏『道綱母』）、上京中であつたらしく⁽¹⁵⁾、親類眷属の者も大勢集まって「うち笑ふことがちにて」一日が暮れた。

(B) つとめて、客人帰りぬる後、心のどかなり。(帰宅して)ただいまある文を見れば、「長き物忌にうちつづき着座といふわざしては、つつしみければ。今日なむ、いととくと思ふ」など、いとこまやかなり。返りごともので、いととげにあめれど、よにもあらず、いまは人知れぬさまになりゆくものと思ひ過ぐして、あさましううちとけたること多くてあるところに、午時ばかりに、「おはしますおはします」とののしる。いとあわたたしきこちするに、はひ入りたれば、あやしくわれか人かにもあらぬにて、向かひるれば、こちもそらなり。しばしありて、台などまゐりたれば、すこし食ひなどして、日暮れぬと見ゆるほどに、「明日、春日の祭なれば、御幣出だし立つべかりければ」などて、うるはしうひき装束き、御前あまた引きつれ、おどろおどろしう追ひち

らして出でらる。

この年天禄三年に入って、兼家の二度目の来訪の朝（前章段(A)の記事）は、雨になった。「雨いとどかに降るなり。格子などあげつれど、例のやうに心あわたたしからぬは、雨のするなめり」という。この「心あわたたしからぬは」について、犬養氏は、「兼家の態度についていう。作者の心境と解く考え（いつものようにあわただしい気分でないのは。「心あわたたしからぬは」は作者の心持。通説が解くように兼家の態度を、「心あわたたしからぬは」といったのではあるまい。それならば「心あわたたしげならぬは」と書くだろう（『全集』『全訳注』）もあるが、直後の「されどとまるかたは思ひかけられず」との関連から、兼家の態度とみたい⁽¹⁶⁾と言われた。とつてもどかに降る、早い春の雨音を耳にしながら、兼家はゆっくりと時間をかけて道綱母との情交を楽しむのである。「されどとまる方は思ひかけられず。とばかりありて」の「とばかり」について、岩佐氏は「作中一五例の「とばかり」はいずれも諸注に言う如く「しばらく」と解して誤りでないには違いない。しかし、この「とばかり」には更に深い意味が秘められていることは、状況から見て明らかだ⁽¹⁷⁾とされる。そして、稿者が右に挙げた後の章段(B)の記事中の「しばしありて」にも同時に触れて、「夫の到来と退去の、その間に挿入された「とばかりありて」「しばしありて」とは、言わずと知れた、夫婦の情交の時間を示す臙化表現である⁽¹⁸⁾と言われる。氏のこの読みは、「とばかりありて、……起き出でて、なよよかなる直衣、……帯ゆるるかにて、歩み出づるに」と後続する文章からみて十分に肯い得る論断と稿者も思うのだが、氏は更に続けて、「兼家は、白昼の訪問であろうと、頓着せず、従者にも女房にも明らかに知られる形で、あからさまに作者に共寝を要求する。天禄三年は兼家四十四歳、作者三十六歳程の年頃ともなれば、周囲の眼に対する「年甲斐もなく、……」という恥らい、また読者に対する挨拶の意をこめて——更にうがって考えれば、この年齢にしてなお夫をひきつける魅力を失わぬ自らへのひそかな誇りをすらもこめての逆説的表現として、「あやしくわれか人かにもあらぬにて、向かひみれば」を読みとる視点もまた、本記読解上必要なのではあるまいか⁽¹⁹⁾と言われる。そして、こゝにあるのは、道綱母の「憂愁のポーズをとったひそかなおのろけ」⁽²⁰⁾であるとも氏は論断されるのである。

ところで、こゝを読み解くに当たって岩佐氏は、次の章段をも引用された。天禄三年に続く天延元年（973）二月三日の記事である。

(C) さて、(天延元年二月)ついたち三日のほどに、午時ばかりに見えたり。老いて恥づかしくなりにたるに、いと苦しけれど、いかがはせむ。とばかりありて、「方塞がりたり」とて、わが染めたるとも言はじ、にほふばかりの桜襲の綾、文はこぼれぬばかりして、固文の表袴つやつやとして、はるかに追ひちらして帰るを聞きつゝ、あな苦し、いみじうもうちとけたりつるかな、など思ひて、なりをうち見れば、いたうしほなえたり、鏡をうち見れば、いと憎げにはあり。またこたび憂じはてぬらむと思ふことかぎりなし。

こゝにも「この年齢にしてなお夫をひきつけ得る己の魅力をひそかに誇る逆説的表現が「老いて恥づかしくなりにたるに、いと苦しけれど、いかがはせむ。……鏡をうち見れば、いと憎げにはあり。またこたび憂じはてぬらむと思ふことかぎりなし」と長く続く⁽²¹⁾のだが、その逆理の表現とはみごとに対照的に、兼家のあでやかな風姿を描く筆は直截で、前の章段(A)、後の章段(B)、そして、この(C)章段と、その退去の程のよさをも叙して、讚嘆に満ちている。

こゝを解説して上村氏は、「この項(前の章段(A))を読むと、高官兼家の悠揚迫まらない風姿が目につかぶ。りっぱな直衣をゆったりと着、桂を指貫の上に垂らした、うちくつろいだ姿で悠然と縁側にあられる。そして侍女が勧める食事も断って庭をながめ、「前裁をらうがはしく焼きためるかな」と一言感想を洩らし、雨の中を大ぜいの供人が軽々担ぐ車に乗りこみ、やがて牛にひかせて出て行くと静かに煙る春雨の中を先払いの声次第に遠ざかっていく。まるで絵巻の中の主人公である⁽²²⁾と言われた。更に木村氏は、後の章段(B)の「うるはしうひき装束き」以下の兼家の退去の叙述に触れて、「前段にあざやかに造型された、威風堂々と作者の家を去ってゆく兼家の姿が、こゝにまた見られる。前段よりも簡潔な表現で、前段の残像を巧みに使って描かれている。そうした兼家の姿に吸い込まれていくような作者の視線を感じさせる⁽²³⁾」と言われる。

まるで絵巻の中の主人公然とした高官兼家の悠揚迫まらない、或は威風堂々たる、その風姿は、実は他ならぬ道綱母自身が造り上げたものであった。「そうした兼家の姿に吸い込まれていくような作者の視線」は、同時に、実は彼女自身の「染色者としての誇り、ひいては家の妻としての自負⁽²⁴⁾」にきらめいてもいたのである。

「夫の衣服の調製は妻たる者の義務であると同時に、いわゆる「召人」クラスの愛人には手の出せぬ、妻の特権でもあった。廷臣の装束が妻方の責任で調えられるということは

社会通念として既に定着していた。多分に「恣意的な夫の訪問にも拘らず、作者は妻として、常に夫の衣裳を幾組も用意している。そして装束を解いて共寝したのち、決して来た時のままの服装では帰さず、かねて用意の衣裳の中から、折節なり行く先なりに最もふさわしいものを選び、そっくり着替えさせて帰すのである。「なよよかなる直衣云々」という、柔らかくしつとりと、適度の重みをもって肌になじむ上質の布地を、細心の注意を払って仕立てあげ、それを夫が着こなした効果の程を目を細めて眺めている妻の思いが、「よい程」の一語に凝縮されているではないか⁽²⁵⁾。

更に、「にはふばかりの桜襲の綾云々」は、また打って変って、堂々たる束帯の盛装である。下襲の綾の浮文の見事さ。「こほれぬばかり」とはまさに、自らの裁量のもとに織立てさせた、その布地の出来栄を誇らしげに見定める製作者のまなざしであり、「わが染めたるとも言はじ」と相伴って、妻ならでは味わえぬ生活の中の満足感を如実に表現している⁽²⁶⁾。

前述、正月十四日の、兼家の袍の仕立て直しを巡っての贈答にみえた道綱母のあの明るい諧謔の応酬も、実は、この日常生活の中で、言うところの「召人」などではない、大納言藤原兼家の、他ならぬ妻としてその所与を充足し得ているという自負に裏づけられてのものだったのである。

四

ところで日記は、その臚化表現ながらも、兼家との情交の場面を描き、——前の章段(A)の記事中の「とばかりありて」と、後の章段(B)の記事中の「しはしありて」と——また、兼家の妻としての自負が満たされてゆく状況を叙し——前後章段(A/B)と序に(C)にも見える兼家の服飾表現は、日記下巻に集中しており、その斬新な表現に於いて、下巻を特色づけていると言っていい——ながら、まるでその場面や状況を囲み込むように、或は額面に納めてそれを縁取るようにして、洛中をしめやかに推移する自然のたゞずまいを、泌々と描いてゆくのである。

即ち、前の章段(A)の記事に続けて、

日ごろ、いと風はやしとて、^{みなみおもて}南面（平素、兼家を迎える表座敷）の格子はあげぬを、今日、かうて（威風堂々、大官然として帰っていった兼家を「ねたげ」に見送った、そ

の心の余韻のうちに) 見出だして、とばかりあれば、雨よいほどにのどやかに降りて、庭うち荒れたるさまにて、草はところどころ青みわたりにけり。あはれと見えたり。また、後の章段(B)の記事に先んじて、三日になりぬる夜降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。簾^{すだれ}を巻きあげてながむれば、「あなさむ」といふ声、ここかしこに聞こゆ。風さへはやし。世の中いとあはれなり。

そしてまた、後の章段(B)の記事に続けて、いかなるにかありけむ、このごろの日、照りみ曇りみ、いと春寒き年とおぼえたり。夜は月あかし。十二日、雪、こち風にたぐひて散りまがふ。午時^{ひまどき}ばかりより雨になりて、しづかに降りくらすにしたがひて、世の中あはれげなり。

記事中「あはれと見えたり」「いとあはれなり」「あはれげなり」と繰り返される「世の中」は「目に触れ心に触れる何もかも」⁽²⁷⁾であり、「人間界と自然界との総合的世界」⁽²⁸⁾であると言う。兼家との情交の時間の描写もまた、絵巻の中の主人公然とした兼家の鮮やかな風姿の叙述も、それは共に妻としてのその所与に自足する道綱母の客観の視線にとらえられたものであったが、その覚めた視線が、「目に触れ心に触れる何もかも」という、その人間界をくるめた自然の、その確かな推移の中に視点を定めた時、もはや兼家との日常は存在感を弱め、言ってみれば、物語の点景となって矮小^{わいしょう}化してしまうのである。前の章段(A)の記事以後、「些細な天候の推移を記述しているあたり、座右にメモを置いている証拠は、あきらかだ」⁽²⁹⁾が、そのメモを駆使して道綱母は今、兼家と係わる自分を主人公にして、一つの客観世界を構築してゆく。年頭に当たって、「かくてまた明けぬれば、天禄三年といふめり」と書いた、あの「めり」の判断辞に託した、や・ニヒルとも見える傍観者の、その視座に立って、彼女は今や紛うかたなく、物語作者としての表現者の相貌をあらわにして来るのである。

日記は次に、石山寺の法師がもたらした夢の話を契機にして、道綱母の養女迎いの章段に入ってゆく。それは、物語作者風の傍観の視座に生きようとしても、現実にある、「自侍の裏に貼りついて離れぬ「待つ女」の憂鬱、老いの子感ゆえに、自己の判断で養女を迎え、兼家から独立しても生きて行ける自分への変身を試みる、大人の人生設計への旅立ちである。」⁽³⁰⁾という。

だがこゝでも、道綱母は物語作者風の相貌を変えない。と言うよりも、円熟した表現者として、その相貌をいよいよ鮮明にしてゆくのである。

今十八歳の一人っ子道綱を生なして以来長く「子宝に恵まれない道綱母は、日頃から寺社詣でをして子宝祈願を行っていたがその甲斐もなく、更に三十六歳となった今となつては、年齢的にも子供は諦めざるを得なかった。それならば次善の事として、育ちのよい女の子を養女として迎え、道綱とも仲良くさせ、道綱母自身は死に水を取ってもらえたらよいと考えて養女を迎えることを決心した。その人選過程で、人の勧めもあり、兼家の子で、陽成院の後裔である源宰相兼忠女腹の女子が候補者として浮かび上がって来たのである。兼家が源宰相兼忠女の許に通つたのは、父兼忠が逝去した天徳二年七月一日以降であり、女兒が生まれたのは天徳三年末から同四年初夏頃であろうと考えられている。従つて道綱母が養女として迎えた時は十二、三歳に成長していたのである。同じく天禄三年二月の記述によると、人からこの女兒のことを聞いた道綱母は、「そよや、さる事ありきかし。故陽成院の御のちぞかし云々」と、十余年前兼家が兼忠女に通い出し、やがて女兒を儲けたいきさつを熟知している様子で、兼家と兼忠女との間に交された贈答歌まで揚げている⁽³¹⁾。

この月ごろ思ひ立ちて、これかれにも言ひ合はすれば、「殿（兼家）の通はせたまひ①
げんさいしやうかねただ
 し源宰相兼忠（第五十七代陽成天皇の皇子源清蔭の子息。伯父貞元親王の養子となつたらしく、正四位下、参議に昇つた）とか聞えし人の御女むすめの腹にこそ、女君（後に、兼家女詮子——時姫腹。円融帝女御。一条帝母——が皇太后宮に立後の際、宣旨となつた人と推定されている）いとうつくしげにて、ものしたまふなれ。おなじうは、それをやはさやうにもきこえさせたまはぬ。いまは志賀②の麓が ふもとになむ、かのせうと（兼忠女の兄）の禅寺の君といふにつきて、ものしたまふなる」などいふ人ある時に、「そよや、さ③ることありきかし。故陽成院（第五十七代陽成天皇。天曆三年（949）九月二十九日④

崩)の御後ぞかし。^{さいしやう}宰相なくなりて(天徳二年(958)七月一日、五十八歳で歿。兼家は時に三十歳であった)まだ服^{ぶく}のうちに、例のさやうのこと聞き過ぐされぬ心にて、何くれとありしほどにさめりしことぞ。人(兼家)はまづその心ばへ(例の好き心)にて、(何くれとありしほどに、)(女も)ことにいまめかしようもあかぬうちに、^{よほひ}齢なども、あうよりにたべければ(かなりふけていたはずなので)、女はさらむとも思はずやありけむ。されど、(女の)返りごとなどすめりしほどに、みづから(求婚のために、兼家自身が)ふたたびばかりなどものして、いかでにかあらむ、^{ひとへ きぬ}単衣のかぎりなむ、取りてものしたりし(兼家が兼忠女の許から持って帰って来た(通説)。或は、兼家が道綱母の所から持ち出して、兼忠女の所へ出かけて行った。単は先方への贈り物に用いたか(新説32)。通説に従った場合、『全訳王朝』は、順序は逆になるが、『源氏物語』の「空蟬」を連想して、「この時女は逢はずして逃げ隠れ、兼家は単衣を捕へて、その形見として持ち帰ったものなぞか」といつている⁽³³⁾)ことどもなどもありしかど、忘れにけり。さて、いかがありけむ、(兼家)関越えて旅寝なりつる草枕かりそめにはた思ほえぬかなとか、いひやりたまふめりし(歌は)、なほもありしかば(ありきたりの歌だったので)、返り、ことごとしうもあらざりき。(兼忠女)おぼつかなわれにもあらぬ草枕まだこそ知らねかかる旅寝はとぞありしを、『旅かさなりたるぞあやしき。などもろともに』とて笑ひてき。

波線部㉑の「どういふことだか、詳しい事情は分からないが」について、諸注は兼家と兼忠女の結婚の成立を暗示した臚化表現だとみている。それは道綱母自身の結婚を「いかなる朝^{あした}にかありけむ」(上巻。天曆八年秋)と記したのと同趣である。それは、そういう解釈でいいのだが、直前にある㉒「いかでにかあらむ」や後続の贈答歌に続くもう一首の兼忠女の歌に注して「いかなる返りごとにか」とある疑問表現と共に、これらは、物語の文体に於ける「地の文」に相当している。物語の聞き手は、語り手が語るまゝに登場人物の動静をひたすら追っている。そこに急に語り手が顔を出して、つまり「地の文」で、「どうしたのだったかしら」という。そうすると聞き手の方は相手が二つになる訳だが、それだけ聞き手にとっては理解すべき場面や状況の把握により客観性が出て来る訳なのである。「いかがありけむ」という疑問表現或は臚化表現を割り込ませることで、聞き手の早急な思い込みを排し、話の背景を茫漠とさせた、その中で、「これかれ」の人を登場さ

せ、語り手はその人と対応する。そして、傍線部①から⑰に至るような語りの表現、つまり、過去の事実の確認に働く判断辞の「き」、また、伝聞や推定によって譲歩することで却って、過去の事実の真実性を証する「なり」「めり」「けり」「けむ」などの辞を使うことで、客観的かつ極めて印象的に過去の事実を再現してゆく。これは確実に、物語文学の手法である。

波線部◎は、「兼家が「逢坂の関」に因んで「旅寝」と詠んだのにつられて、先方がまた「旅寝」と詠んだのを揶揄したもので、故兼忠邸に通った兼家には旅寝だが、兼忠女には旅寝ではない⁽³⁴⁾。

この条、底本では、「たひかさなりたるそあやしきなともろともにとそわらひてき」とある。これを『全注釈』は「底本「とそ」をそのまま認めると、「笑ひてき」を「笑ひてし」と改めねばならないが、「き」を「し」の誤と見ることは書体上可能性が乏しいので「とそ」の「そ」を「て」の誤字と見て改めた」としている。先にあげた『古典集成』の本文は、この改定案に従ったもので、『新日本古典文学大系』もこれに従っている。

それに対して、『全集』は「底本のままでは「と」が邪魔になり、かつ「ぞ」が「笑ひてき」の結びと合致しない。それで「とそ」二字を「も」一字の誤写と見る、として、『旅かさなりたるぞあやしき』などもろともにも笑ひてき」と改め、同時に改めた「など」以下を地の文として処理されている。『全訳注』も同じ。また、川口氏の『古典文学大系』は「もろともにしも」と読んで、こゝを地の文にするのは『全集』と同じである。

『全集』以下の三氏の処理に従えば、こゝは、「『こちらは旅だが、むこうまで旅と詠んだのは変だな』などと言って、いっしょに（二人で）笑ってしまったのです⁽³⁵⁾」と口訳される。兼忠女の、「返歌としても、「旅寝」を繰り返すのは、べた付きで妙がない⁽³⁶⁾」、その未熟の歌を前に置いて、兼家と道綱母と二人して哄笑する、その睦みの場面を設けてゆくこの読みは、この章段を構成してゆく物語文学的な手法によりそぐうようである。

六

ところで、志賀の麓に侘住居をする兼忠女には京に「異腹のせうと」がいて、法師になっていた。道綱母にこの話を持ちこんだ人がその法師と知り合いであったので、「それして呼びとらせて語らはするに、」法師もこの話には賛成だと言う。そして翌日早速、仲介のために志賀の山を越えて行ってくれた。

またの日といふばかりに、山越えにもものしたりければ、異腹にてこまかになどしもあらぬ人のふりはへたるを②あやしがる。「なにごとによりて」など③ありければ、とばかりありて（こゝは、前にみた「情交」の描写ではなく「暫時」の意）、このこと（養女の一件）をいひ出だしたりければ、まづ、ともかくもあらで、いかに思ひけるにか、いと④いみじう泣き泣きて、とかうためらひて、「ここにも、いまはかぎりに思ふ（この世を見限つて、出家しようと思う）身をばさるものにて、かかるところに、これをさへひきさげてあるを、いといみじと思へども、いかがはせむとてありつるを、さらば（そういうお話があるのなら）、ともかくも、そこに思ひ定めてものしたまへ」と⑥ありければ、またの日かへりて、「ささなむ」といふ。

諸注もこもごも言う如く、この章段に見える物語文学的な手法或は、構成は極めてあらわである。傍線部①③～⑥の部分、伝聞辞の「けり」を用いて叙述が進められているのは、後で人に聞いての描写であるからだが、本来は一人称の視点で書いて来た『蜻蛉日記』の中に、所謂「けり」叙法に依る「超越的視点」を持ち込むことで、この場面は極めて物語的に構成されている⁽³⁷⁾。その点、傍線部②の「あやしがる」の現在形終止の直叙は例外だが、それとても、傍線部⑤の「いかに思ひけるにか」の疑問表現が、物語の「地の文」の効用をも果して、この章段の超越的視点をいっそう高めているのと相俟って、この唐突な訪問の、正に物語的な場面の緊迫感を出すことに成功しているのではないか。

それから後も、二度ばかり手紙をやって、話がすっかり纏まったので、仲介を頼んだこの禪師たちが先方に行って、娘を京に出立させることになった。

「この十九日、よろしき日なる（養子縁組をするのによい干支の日で、方も塞がらないことをいう。天禄三年二月十九日庚辰（『日本紀略』）⁽³⁸⁾を」と定めてしかば、これ迎へにものす。忍びて、ただ清げなる網代車あじろぐるまに、馬に乗りたるをのこども四人、下人しもびとはあまたあり。大夫たいふ（道綱）やがてはひ乗りて、しりに、このことに口入れたる人（今度の一件に口をきいた人）と乗せてやりつ。

このあたりもやはり、諸注が指摘するように、物語的な構成の目立つところである。前

述の通り、養女迎えの契機となったかに叙述されて来た石山寺の法師の夢の話——「かくはあれど（夢では瑞兆がしきりにあったけれども）、ただいまのごとくにては、ゆくすゑさへ心細きに、……いかで、いやしからざらむ人の女子ひとり取りて、云々」——が道綱母の所にもたらされたのは二月の十七日。次にこゝに十九日とある。養女の一件はこの二日間で進捗したかに見えるが、道綱母の養女迎えの心積りの事実実は、早くからあった。

いかで、いやしからざらむ人の女子ひとり取りて、後見もせむ、ひとりある人（道綱）をもうち語らひて、わが命のはてにもあらせむと、この月ごろ思ひ立ちて、これこれにも言ひ合はすれば、（以下前述）。

と言う。つまり、石山寺の法師のみた霊夢と、道綱母が将来設計のために養女を迎えようと心積りしたという事と、事実としては別々の出来事を叙事の上では脈絡をつけて、物語風に構成しているのである。この叙事のデフォルメは更に工夫されて、養女を迎え入れたこの夜、『全訳注』も言うように、「めったに姿を見せない兼家が夜が更けぬ前に訪れて来たのも腑に落ちない。話をさらに面白くするための作者の場面設定ではあるまいか」と疑わせる程に、叙事は物語風に構成されている。そうして構成された場面は、兼家、道綱母、養女、（道綱）の三者（四者）の鉢合わせとなり、

聞きつる年よりもいと小さう、いふかひなく幼げなり。近う呼び寄せて、「立て」とて立てたれば、丈四尺ばかりにて、髪は落ちたるにやあらむ、裾そぎたるこちして、——（「すそ」は髪のかぶ。 「そぐ」は髪のかぶを揃えるため切り落すこと。切り落したと確かにわからぬが、そんな感じだというのである。母親が送り出す時、整髪してやったのであろう（『全訳注』）。「裾そぎたる」は髪が脱け落ちて毛の末の方が少くて、まるでそぎ落としたように見えるさま。十分栄養も取れず苦勞したことのあらわれである。髪のかぶを揃えたのではあるまい。その髪の様から、可憐な美少女の苦勞したあとを、作者は感じとっている。（『全訳注』『全集』）。——丈に四寸ばかりぞ足らぬ。いとらうたげにて、頭つきをかしげにて、様体いとあてはかなり。……（少女の素姓を兼家の）「いかにいかに。いづれ（の通り所）ぞ」とあれど、とみにいはねば、「もし、ささ（兼忠女）のところとありと聞きし（子）か」とあれば、「さなめり」とものするに、「いとみじきことかな。いまははふれうせにけむとこそ見しか。かうなるまで見ざりけること

よ」とてうち泣かれぬ（主語は兼家。「れ」を通説は尊敬と見る。それが自然かと思われがなお、自発と見ておく。兼家は今目の前にいる少女をわが子と知って、感動のあまり思わず涙がこぼれて来たのである⁽³⁹⁾）。この子もいかに思ふにかあらむ、うちうつぶして泣きゐたり（幼い女の子は新しい邸でとまどい泣いている⁽⁴⁰⁾）。見る人（傍にいる侍女たち）も、あはれに、昔物語のやうなれば、みな泣きぬ。（我も）^{ひとへ}単衣の袖、あまたたび引き出でつつ泣かるれ（「るれ」は自発。思わず貫い泣きをする）ば、（兼家）「いとうちつけにも（全く藪から棒にも。「うちつけ（唐突）に」は、「かくていましたること」に係る）、ありき（通い所として訪れること）には、いまは来じとするところに、かくていましたこと。われゐていなむ（率て去なむ）」など、たはぶれ言ひつつ（兼家は、もう来まいと思っていた所に、こんなかわいい子が現われたのでは、来るのを止めるわけにはいかないと、冗談をいう。思いがけないわが子の出現に、感極まって涙を流しながら、わざと諧謔を弄する兼家の風格が躍如としている⁽⁴¹⁾）、夜更くるまで、泣きみ笑ひみして、みな寝ぬ。

という。「髪は落ちたるにやあらむ、裾そぎたるこちして」には、上にみた如く、さまざまな解釈が許されて、少女の母親の悲しみやまた、その不幸な生活が透いて見えて来る、その小さな主人公を核にして、この章段は、正に物語の一こまそのものを現出するのである。

それを「あはれに、昔物語のやうなれば」という。他ならぬ道綱母自身の意向で動いて来たこの現実を、まるで「昔物語のようだ」と言う。そして、その言葉をなぞるように、この養女迎えの長い章段を、紛う方のない物語の手法を駆使して、丹念に書きあげた。繰り返して言えば、年頭に当たって、「かくてまた明けぬれば、天禄三年といふめり」と言った、その「めり」表現の判断辞に託して行く、あの己が外界に対するやゝニヒルとも見える傍観者の視座に立って、その今こそ彼女は、表現者としての非情と^{きょうじ}矜持を、併せて確実に獲得したのである。

七

その表現者の非情と言えば、養女迎えの章段には、わが子を養女として出さねばならぬ兼忠女の悲しみを思い遣る糸が一再ならず出て来る。

その一つは、兼忠女の流浪に似た生活を想い描くところ。

かの志賀の東の麓^{ふもと}に、湖をまへに見、志賀の山をしりへに見たところの、いふかたなう心細げなるに、明かし暮らしてあなると聞きて、身をつめば（わが身を^{つね}抓ってみると。夫に捨てられた女の身を他人ごととも思えず、わが身に重ね合わせてみると）、なにはのこを、さる住まひにて思ひ残し言ひ残すらむ（「何を、……思ひ残し言ひ残すらむ」の反語表現）、とぞ、まづ思ひやりける。

その二つは、養女迎えの話が進んで、道綱母から出した、養女にとの依頼の手紙に兼忠女が応じたところ。

（兼忠女）「よろこびて」などありて、いと心よう許したり。かの語らひけることの筋（禪師が兼忠女との間に立って進めた話の経緯）もぞ、この文（兼忠女からの返事）にある。かつは思ひやるこちも（思い通りになったことを喜ぶ一方では、いとし子を手離す母親の心中を察すると⁽⁴²⁾）いとあはれなり。よろづ書き書きて、「霞にたちこめられて（涙で目先もくもって）、筆の立ちど（筆をおろす場所。「ど」は処）も知られねばあやし（しどけない手紙になってしまいました）」とあるも、げにとおほえたり。

前条には、「当時の女性が、両親を失い、頼りに出来る兄弟縁者を持たず、夫に捨てられた場合、たどるみじめな生き方の一つが、兼忠女に窺われて、あわれである」⁽⁴³⁾。その事を道綱母は、「身をつめば云々」と書くことで、兼忠女に対する共感を述べながらも、それを「まづ思ひやりける」という。「ける」は過ぎ去った過去を遠くに置いて詠嘆することばである。こゝを「思ひやりたり」と書くのと較べると、書く自分と書かれている自分との間に客観的な視座が設定されて来る。つまり場面の物語化への目が見える訳だが、そこに表現者の非情も同時に、生まれて来るのだ。事実としても、「道綱母は自分の将来のことばかりを考えて、女子をとりあげている。兼忠女の権利とか人格は全く無視されている」⁽⁴⁴⁾のだ。『蜻蛉日記』上、中巻の道綱母は、兼忠女のような女性の境涯に共感を示して、「待つ女」の哀しみを生む招婚婚下の社会に対する告発者として在った筈である。今や、表現者の非情が、かつての告発者としてのidentityを奪ってゆくのであろうか。

また後の条には、「霞にたちこめられて、筆の立ちども知られねばあやし」とある。こ

の「霞に」以下の文面を摘記したのは、その修辞に心をひかれたためと思われる、と『全注釈』は言うが、それにしても「あやし」の文末表現は不自然である。「こゝは余情をこめた連用形「あやしく」の方が似つかわしい」⁽⁴⁵⁾。「手紙では「月もみなくにあやしく」(中巻。天禄二年三月。稿者注)のように連用中止が一般ではないか。「しく」の連綿体が「し」一字に誤られた可能性がある」⁽⁴⁶⁾と今西氏は言われている。だが、底本にも「あやし」とある、こゝの手紙の終末部の不自然は、道綱母の創作とみるべきではないか、と稿者は思う。『旅かさなりたるぞあやしき』と言って道綱母はかつて、兼家と二人して笑った、その言葉選びに当って軽侮の対象となった兼忠女の悲しさがこゝにもある。こゝには、兼忠女に対する同情の筆致を取りながらも、ひたすら物語の造型に賭けてゆく道綱母の表現者としての非情があると言えは言い過ぎになるであろうか。

『蜻蛉日記』下巻は日記の終焉を語っている、というのが諸注に於ける大方の見解である。「兼家との愛憎に浮沈する女の業を(激越に)綴り続けた道綱母は、(中巻に於ける)鳴滝籠りを一応の段落として、以後、兼家の妻妾の一人として安んじてゆこうとする。その意味で本来の主題は消滅したかも知れない。その限りでは『蜻蛉日記』の終焉である」⁽⁴⁷⁾。だが、道綱母は下巻に至っても、兼家との係わりの終りのなさをなおも飽くことなく、だがそれは激越にではなく、覚めた目をして淡々と書き続けてゆく。

「世の中いとあはれなり」という、己を取り巻くすべての事象の中に深々と沈潜して、己の身に継起するさまざまを覚めた目で、物語的手法を駆使して、時にあつては非情なまでの筆で叙述・造型してゆく。そこには、道綱母の表現者としての転身があった。それは「かげろふ的世界」の終焉ではなく、「かげろふ的世界」を一つ先に出て、それを超克してゆく精神の営為であった。その先に、『源氏物語』への道も見えて来るのである。

(注) 野瀬>全注釈人々の評釈の文忠兼、ふりかへりさす干支、たまきまりやむさこの示さる共の玉葉の對文さすの文忠兼、お母綱母の巻中、上「蜻蛉日記」、その「し」

(1)(8)(10)(22)(35)(40)(44) 上村悦子氏『蜻蛉日記(下)』全訳注』(昭和五十三年九月刊)

(2)(11)(23)(28)(35)(37)(39)(41)(42) 木村正中氏『日本古典文学全集

『蜻蛉日記校注』(昭和四十八年三月刊)

(3)(5)(9)(13)(29)(33)(43)(45) 柿本奨氏『蜻蛉日記全注釈 下巻』(昭和四十一年十一月刊)

(4)(12)(15)(16)(27)(34)(47) 犬養廉氏 新潮日本古典集成『蜻蛉日記』(昭和五十七年十月刊)

(6)(14)(36)(38) 川口久雄氏 日本古典文学大系『かげろふ日記』(昭和三十二年十二月刊)

(7)(32)(46) 今西祐一郎氏 新日本古典文学大系『蜻蛉日記』(平成元年十一月刊)

(17)(18)(19)(20)(21)(25)(26)(30) 岩佐美代子氏「我が染めたるとも言はじ」——蜻蛉日記服飾表現考—— 上村悦子編『王朝日記の新研究』(平成七年十月刊) 所収

(24) 篠塚純子氏「かげろふ日記ノート69・70」『形成』(平成元年八・九月刊)

(31) 鶴田光枝氏「道綱母の養女について」上村悦子編『王朝日記の新研究』(平成七年十月刊) 所収

なお、日記の本文及びその割注は、犬養廉氏の新潮日本古典集成『蜻蛉日記』より引用した。

On the structure of the Book Three of Kagero Nikki

Terumi Mathubara

Abstract

Kagero-Nikki Book Three is distinctly characteristic of narrative literature in its structure and technique of subjective description, which has induced most critics to see the author's subjectiveness in the description of her love and hatred toward Kaneie, her husband, in Book One and Book Two fade away and the typical world of Kagero-Nikki come to a close.

However the present writer regards it not as the termination of the world but as the author's shift from that world. Michitsuna-Haha, the author of this diary, after a long process of maturity in description, finally subjugate the world of psychological complex of Kagero-Nikki and procures a stance of an objective observer and narrator of her own life. This is to lead to the world of the Tale of Genji.

吉川 辰夫 著

高松大学紀要 第27号

高松大学出版部 発行

高松大学紀要 第27号

高松大学紀要

第 27 号

平成9年3月20日 印刷
平成9年3月20日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960番地
TEL (0878) 41-3255
FAX (0878) 41-3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (0878) 33-5811